



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	報知社と『ロミオとジュリエット』(fulltext)
Author(s)	近藤,弘幸
Citation	英學論考(47): 1-18
Issue Date	2018-12-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/150657
Publisher	東京学芸大学英語合同研究室
Rights	

報知社と『ロミオとジュリエット』

近藤 弘幸

(KONDO Hiroyuki)

はじめに

明治期の『ロミオとジュリエット』 *Romeo and Juliet* の受容史をたどってみると、明らかになることがひとつある。それは、日本の読者にこの恋愛悲劇を紹介した最初の三つの作品の上梓に、いずれも報知社が関与していたということである¹。報知社は、福沢諭吉門下の矢野文雄、藤田茂吉などが健筆をふるい、いわゆる「民権派」の大新聞として知られた『郵便報知新聞』の発行元である。野崎左文が、明治前半の新聞各紙の説明として、天下国家を論じる大新聞と、通俗的大衆紙の小新聞の区別を挙げ、その違いのひとつとして、前者が「小説を掲げ」なかったのに対し、後者は「續き物と稱する小説を連載」したと述べて以来²、この差異は日本のメディア研究において大枠で受け継がれてきた。しかし『郵便報知新聞』の紙面を確認してみると、実際にはかなり早い段階で続き物の連載が試みられていたことがわかる。その材源が、ラム姉弟 *Mary and Charles Lamb* による『シェイクスピア物語』 *Tales from Shakespeare* であり、最初の連載は明治 16

※ 本論は、東京学芸大学で開催された国際学術大会「東アジアの知識と知識権力——知識に対する認識と伝統」(檀国大学校日本研究所/人文韓国プラス(HK+)研究所/東京学芸大学古典文学研究室主催、2018年9月7日および8日)における口頭発表に、加筆・修正を施したものである。金静熙氏には当日司会の労をおとりいただいた。記して感謝したい。

¹ 明治の『ロミオとジュリエット』受容史については、近藤弘幸「明治の『ロミオとジュリエット』——シェイクスピアと日本の英語教育」、『人文研紀要』第91号(2018年)、1-35頁を参照。

² 野崎左文『私の見た明治文壇』(春陽堂、1927年)、7頁。

年（1883年）3月にまでさかのぼる。

こうして複数のシェイクスピア作品の紹介に貢献した報知社であるが、その『ロミオとジュリエット』への関心は突出している。一体この作品の何が、国会の早期開設を主張し、自由民権運動をリードした報知社関係者の心を、このように引きつけたのだろうか。この問いに対するひとつの仮説を提出することが本論の目的である。そこで本論では、まず報知社の誕生と改革を概観し、同紙における続き物誕生の経緯を確認する。後半では、同時代の政治小説の流行との関りを考察し、『ロミオとジュリエット』が政治的な物語として受容されていた可能性を提示する。

『郵便報知新聞』の誕生と改革

『郵便報知新聞』は、駅通頭の前島密の命を受け、日本橋横山町で和泉屋という出版社を経営していた太田金右衛門によって創刊された。のちに前島は当時のことを次のように回想している。

めいち ねん いうびん そしき やゝそのていさい な しんぶんし そうたつ こと
明治五年には、郵便の組織の稍其體裁を成して、新聞紙を送達する事
でき やう たうじ しんぶんし ほつだ
も出来る様になりましたが、當時は新聞紙の發兌がまだなかつたので、
そのほうはふ まう たゞな
其方法は設けたけれども只名ばかりであつたのです。〔……〕

さて規則を設けた以上は、之を實行して見たいので、新聞雑誌の出る
じつ まちどほ つい まちかね みづか すゝ しんぶん だ み
のが實に待遠であつて、遂に待兼て自ら進んで新聞を出して見たくなつ
たう じよこやまちやう いうびんしきよく お おほたきん 島もん ひと
たのです。當時横山町に郵便支局を置いて、太田金右衛門といふ人の
きよたく ぶぶん きよくしや あ そのおほた ひと そ こ しゆにんしや
居宅の一部分を局舎に充てゝ、其太田といふ人を其處の主任者にしたの
もとも このひと ほんげふ しよし しゆつほんぶつ すで けいげん
ですが、元と此人の本業は書肆ですから、出版物には既に経験があるの
わたくし このひと わか しんぶんし よ えき またじぶん りえき
で、私は此人に向つて新聞紙の世に益があつて又自分の利益にもなる
もの こと と そのほつだ すゝ
者である事を説いて、其發兌を勧めたのです。³

編集には、前島の秘書・小西義敬が当たり、明治5年6月10日（1872年7月15

³ 前島密『郵便創業談』逓信協會編（逓信協會、1936年）、104-05頁。

日)に第1号が刊行された。やがて小西は駅通寮を辞めて新聞編集に専念する。明治6年(1873年)5月の第51号からは太田金右衛門の名前が発行人から消え、発行元として報知社の名前が掲げられるようになった。社長となった小西は、友人の岡敬孝を同社に招く。旧幕臣で沼津兵学校出身の岡は、多くの同校出身者と同じように教員を目指していたが、その道を捨て、『郵便報知新聞』の編集主幹(「編次」としての仕事に専念することを選んだ⁴。

明治7年(1874年)1月17日、古沢迂郎(滋)、岡本健三郎、小室信夫、由利公正、江藤新平、板垣退助、後藤象二郎、副島種臣の連署で「民撰議院設立建白書」が左院に提出され、自由民権運動が本格化すると、『郵便報知新聞』は、国会の早期開設を要求する「民権新聞」へと舵を切る⁵。そのため栗本鋤雲が招聘され、同年6月23日発行の第380号からは、編集主幹として、岡敬孝の名前に代わって栗本の名前が印刷されるようになる。栗本は福沢諭吉に、その門下生による投書を依頼し、藤田茂吉、箕浦勝人、牛場卓造などの投書が紙面を飾るようになるとともに、「民撰議院設立建白書」の起草者のひとりで、板垣退助の秘書を務めていた古沢が入社する。明治8年(1875年)3月、大阪会議を経て板垣が政府に復帰するとともに古沢は退社するが、それを受けて藤田、箕浦、牛場が幹部として入社する。明治10年(1877年)1月にはやはり福沢門下の矢野文雄が入社する。

⁴ 岡は「小學校教員試験を目指して、既に千人の応募者中、四百人の選拔者が数へられ、教壇に立つ身を、翻へして新聞社に」入ったものとされている(篠田鑛造「報知社の岡敬孝」、『明治文化』第10巻第12号(1937年)、6頁(6頁))。報知新聞社・社史刊行委員会編『世紀を超えて——報知新聞120年史』(報知新聞社、1993年)もまた、岡は「旧幕臣で沼津兵学校にいたが、維新後、陸軍教導団に入団、間もなくやめて両国の親類宅に居候していたところ、小學校教員募集の試験を受けて合格、先生になる一歩手前で小西に誘われて新聞記者に転向した」(143頁)としている。しかしながら、小學校教員の資格認定試験が行われたのは明治7年(1874年)7月のことであり(文部省『学制百年史』第10版、全2巻(帝国地方行政学会、1973年)、記述編243頁)、時期的なずれがある。報知社での仕事の傍ら、小學校教員資格認定試験を受験したが、最終的に教壇には立たなかった、ということであろう。

⁵ 報知新聞社・社史刊行委員会編は、「翌日、いち早くこの全文を本紙と日新真事誌の二紙だけが報道したが、これは自由民権へのいい知らせとして、国民の間に異常なほどの歓迎を受け、政府を慌てさせた」(144-45頁)としているが、そのような事実はない。

「当初、この我が国の歴史上はじめて民間で闘わされる政治論争という点で画期的な民撰議院論争は、『日新真事誌』と『東京日日新聞』のみを舞台とするものであって、『郵便報知』は参加できないでいた」(野田秋生『駆け抜ける茂吉——「先覚記者」藤田鳴鶴評伝』(沖積社、2001年)、26頁)という記述の方が正確である。

西南戦争後の明治 11 年（1878 年）、大隈重信が報知社に接近し、両者の提携が成立する。これにより矢野以下数名は報知社を離れ、官職に就くが、いわゆる明治 14 年の政変により大隈が罷免される。

大隈参議が危くも、藩閥からして謀叛人呼ばりをされて入牢でもさせられさうでしたが、ソコまで藩閥も亂暴が出来ず、廟堂から退けられた。表面論旨免官となつて、穏かなやうでも裏面は暗潮漲り亘つて、當時夫々任官してみた、矢野先生始め、犬養、尾崎、島田三郎といった歴々の面々、野に下つて浪人となつてしまつた。コノ虎の如き浪人のやり場に困つて……矢野先生はどうしても新聞紙を持つて此等の浪人の筆陣を張り、藩閥政府攻撃の言論戦をやらかさねばならない。⁶

そこで矢野は「紙幣二萬圓を、本箱へ詰めて、薬研堀の報知社に、人力車を乗付けて、小西義敬へ渡し、首尾よく」報知社を買い取つたが、その「軍備金は、大隈家から出たものとされてゐる」⁷。

こうして矢野文雄は報知社の社主となり、藤田茂吉が編集主幹に就任する。明治 15 年（1882 年）1 月 4 日の第 2673 号には、「主幹 藤田茂吉／補助 犬養毅／同 尾崎行雄／假編輯長 友部鴻漸／印刷長 栗本鋤雲／社主 矢野文雄」と印刷されている。この年の 4 月には大隈が立憲改進黨を結成し、『郵便報知新聞』は實質的にその機関紙となるが、明治 17 年（1884 年）12 月に立憲改進黨が瓦解し、大隈が離党したことで、この政党機関紙時代は終焉を迎える。その後、『郵便報知新聞』は、矢野の指揮のもと、政党機関紙から近代的新聞へと脱皮を図ることになる。

立憲改進黨の瓦解に先立つ明治 17 年（1884 年）4 月 20 日、矢野文雄は『経国美談』などの印税を資金とし、ヨーロッパ視察のため横浜港から旅立った。2 年余りの遊学を経て帰国した矢野は、『郵便報知新聞』の紙面改革に着手する。明治 19 年（1886 年）9 月 16 日の第 4082 号第 1 面には、矢野による「改良意見書」が掲載され、①価格の引き下げ、②紙幅の縮小、③記事の厳選による質の向上、

⁶ 篠田鑑造『明治新聞綺談』（明正堂、1943 年）、306 頁

⁷ 篠田『明治新聞綺談』、287-88 頁。

④文体・語彙の平易化などが打ち出された。

報知新聞社史は、こうした紙面改革のひとつとして、連載小説の掲載を挙げている。1941年刊行の70年史によれば、

歴史の古い報知新聞が、あらゆる創始の魁をなしたのに不思議はないが、新聞の讀物として、連続小説を掲載し始めたのも、また最も古かった。明治十年に入社した龍溪矢野文雄が、政治小説『經國美談』を単行發表して、洛陽の紙價を高からしめたのは、同十五年であつたが、その後間もなく渡歐したので、新聞には試みるに至らなかつたのを、同十九年に歸朝して、第一次の紙面改良と同時に、翌二十年から、先づ附録として試みた。『報知叢話』と題する小冊子で、毎日曜日に添付し、それへ初めて連載したのが、有名な『浮城物語』で、これが本紙における小説掲載の濫觴であつたと同時に、日本新聞界における嚆矢で、間もなく各紙が倣ふやうになつた。⁸

1993年刊行の120年史は次のように述べ、70年史の記述を修正している。

〔明治23年（1890年）〕一月一六日から本格的に連載小説の掲載を始めた。「報知異聞」と題した矢野文雄の新作小説である。これが岩波文庫にも入った「浮城物語」である。日本海軍のインド洋方面への進出をテーマにしたもので、五十年後の太平洋戦争中、一時日本海軍がこの方面に進出したことがあるため、矢野の予言的小説が見直されたほどだった。

矢野は政治評論家であつたばかりではなく、十九年の大改革の直後、自分のアイデアで「嘉波通信——報知叢話」という小説風の風変わりな讀み物を掲載するなど本紙における小説の先駆者でもある。⁹

120年史では、「報知叢話」がすなわちのちに単行本化された『浮城物語』であるという明らかな事実誤認が訂正されているのに加え、「新聞の讀物として、連

⁸ 青木武夫・報知新聞社『報知七十年』（報知新聞社、1941年）、115頁。

⁹ 報知新聞社・社史刊行委員会編『世紀を超えて』、170頁。

續小説を掲載し始めたのも、また最も古かった」との主張が取り下げられ、矢野文雄はあくまで「本紙における小説の先駆者」として位置づけられている。当然のことながら、小新聞は以前から連載小説を売りにしており、矢野は、「小説を掲げるのは恥ずかしいこと」と考えていた「大新聞の偏屈さ」を、「小説で打ちこわした」¹⁰改革者とされる。しかし実際の紙面を検証してみると、『郵便報知新聞』における連載小説の掲載は、かなり早い段階で試行されていたことがわかる。

『郵便報知新聞』における続き物の誕生とシェイクスピア

矢野文雄洋行中の明治 17 年（1884 年）12 月 16 日に発行された第 3537 号の第 1 面に、社主代行の立場にあった藤田茂吉によるものと思われる、「本紙体面ノ改良」と題した社説が掲載されている。社説は、経済記事や海外情報の充実を約束し、「紙面ノ改良ノ實ハ直チニ本日ヨリ續々發兌スルノ紙上ニ存スル」と宣言する。この改革について、藤田の評伝を書いた野田秋生は、「「天気予報」と「商事要報」「最近要報」という経済記事欄が新設されたのみ」¹¹であったとしているが、紙面を確認してみると、社説では触れられていないもうひとつの「改良」が試みられていることがわかる。この日、『郵便報知新聞』に「叢話」欄が誕生しているのである。

『郵便報知新聞』で「本紙体面ノ改良」が発表される前の同年 7 月、『開花新聞』という小新聞に、「開花新聞改題改進新聞」という社告が掲載された。

きた ぐわつ じつ もつ かいしんしんぶん かいだい どうじ じうぜん ほんし あらためばいだい
來る八月一日を以て改進新聞と改題すると同時に従前の半紙を改 陪大
くわうふく せうし きし せつうしんしや せうめん じふぶん ほうだう じぶんぞくしやうさい
廣幅の洋紙となし記者通信者を増員し充分に報道を迅速詳細になし
さしあ ごと よしむねくにまつ りやうにんひじやう べんきやう もつ これ 益が てうこく ちみつ
挿繪の如きハ芳宗國松の兩人非常の勉強を以て之を描き彫刻を緻密に
いんさつ せんめい ねつしんもつ わ りつけんかいしんたう しゆぎ くわくちやう くは
し印刷を鮮明にし熱心以て我が立憲改進黨の主義を擴張せんとす加ふ
かいしんたうしよめいし ぼ ぢよ あほ にち／＼へいし ぢよし かい う
るに改進黨諸名士の補助を仰いで日々平易にして女子にも解し得べき

¹⁰ 報知新聞社・社史刊行委員会編『世紀を超えて』、170 頁。付言すると、70 年史は『経国美談』の刊行年についても不正確である。

¹¹ 野田、150 頁。

論説を掲出し又漫筆の欄を設けて従前の興歌俳句ハ固より斷ず滑稽諧
 謔の文辭を載せ物價の高低船舶の出入の如きに至るまで博渉して洩
 さざるべければ陪舊至大の愛顧を垂れ陸續御購讀彼下度此段廣告候也¹²

これは小新聞の立憲改進黨機關紙化宣言であり、それを主導したのは藤田茂吉
 だった。改題第1号の第1面トップには藤田が九臯外史の号で寄せた「改新の
 説」が掲載され¹³、休刊日を挟んだ3日からは、3日間にわたって「江東中村樓
 に開きたる本社新聞改題祝宴場に於て藤田茂吉君が演説されたる」祝辞が連載
 される。その演説において藤田は、自分が改題を「主唱したるの一人」であると
 表明し¹⁴、次のように述べている。

近來小新聞ハ時勢と共に進歩するの状を呈し各社争ふて其紙面を改良
 し論説記事に注意して互ひに其盛を競ふに至る吾人ハ最早従前の小
 新聞を以て之を視るべからず今の犬新聞ハ即ち昔の小新聞の成長した
 るものなり今や小新聞ハ愈々改良して大新聞とならんとす假令大新聞
 と云ふべからざるも大小の間に一位を占め中新聞の稱を附して區別す
 る所なかるべからず¹⁵

土屋礼子は、この演説において、「中新聞」という概念が、新たな新聞の指標と
 して提出されている」ことに注目し、「大小新聞の差異を解消してゆく方向がす
 でに意識されている」と指摘する¹⁶。政党機關紙化後の『郵便報知新聞』は、一
 般読者の支持を失い、部数の低迷に苦しんでした。そうしたなか藤田は、一方で

¹² 『開花新聞』第412号(1884年7月18日)、第5丁裏。同様の社告は、第414号(21日)5丁表一裏、第418号(25日)第5丁裏、第420号(27日)第5丁表一裏、第423号(31日)第5丁表一裏にも出されている。

¹³ 『改進黨新聞』第424号(1884年8月1日)、第1面。号数は『開花新聞』のものを継承している。藤田茂吉の号としては鳴鶴が有名であるが、「鳴鶴という号は詩經小雅鶴鳴篇から出たもので、鶴鳴九臯、其声聞于天というところから鳴鶴と号し、九臯を別号とし、書樓を聞天樓と号した」(柳田泉『明治初期翻譯文学の研究』明治文学研究第5巻(春秋社、1961年)、270頁)。

¹⁴ 『改進黨新聞』第425号(1884年8月3日)、第1面。

¹⁵ 『改進黨新聞』第427号(1884年8月5日)、第1面。

¹⁶ 土屋礼子『大衆紙の源流——明治期小新聞の研究』(世界思想社、2002年)、35頁。

小新聞に政論紙的性格を与え、他方『郵便報知新聞』では、大新聞としての基本を維持しながら、そこに経済欄のみならず叢話欄をも設ける改革を推し進めていた。つまり彼は、大新聞・小新聞の双方を中新聞化することで、事態を打開しようとしていたのである。

こうして創設された「叢話」欄の輝かしい第1弾が、九阜山史名義で発表された藤田茂吉の「花間の一夢」である。これはラム版に基づく『シンペリン』*Cymbeline*で、この年の大晦日まで連載された。翌年元日からはエドワード・ブルワー＝リットン Edward Bulwer-Lytton の『ケネルム・チリングリー』*Kenelm Chillingly*の翻訳『繫思談』の連載が始まる(画虎山人名義。「名けて繫思といふは原題二語の頭字 kc の呼聲を用ゐたるにて別に意義あるに非ず」¹⁷)。これは、「元来五六ヶ月と期して記載し終る積りにて」始まったものであるが、「原文原意を損せずして譯出せんとすれば之を紙上に掲げ終るには一年有半を費やさざるを得ず大に當初の目的に相違」するとの理由により、4月5日で中絶する¹⁸。休刊日を挟んだ翌7日からは「落花の夕暮」が連載され(無署名だが「花間の一夢」の作者と同一であることは明らか。5月7日まで)、さらに九阜生名義で「栄枯の夢」(7月10日から18日まで)、「雨後の花」(7月27日から8月11日まで)が続く。これらはいずれもラム版に基づくシェイクスピア物で、それぞれ『ロミオとジュリエット』、『マクベス』*Macbeth*、『終わりよければすべてよし』*All's Well That Ends Well*である。その後、寒林学士なる人物による「胸の有邪無邪」という作品が8月23日から10月10日まで連載され、「叢話」欄は姿を消す。

さらに言うならば、こうした続き物が『郵便報知新聞』の紙面を飾ったのは、この時が初めてではない。「叢話」欄創設にあたって、九阜山史こと藤田は、次のように述べている。

セキスビーア
余往キニ撒斯比亞ノ稗史ヲ抄録セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入り
易キ小話ヲ譯出シ之ヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ掲ケテハ以テ泰西ノ
稗史ニ存スル風味ヲ知ラシメテハ以テ余ガ文藻ヲ培養スルノ一助ニ供
センコトヲ期シ三四種ヲ譯シ了レリ爾後故アリテ之ヲ紙上ニ載スルヲ

¹⁷ 『郵便報知新聞』第3550号(1885年1月1日)、第2面。

¹⁸ 『郵便報知新聞』第3633号(1885年4月7日)、第3面。

廢シタレドモ既ニ其稿ヲ脱セル者若干種ヲ存セリ今ヤ本紙ヲ改革シ叢話ノ一欄ヲ置テ日々是等ノ文辭ヲ掲クルコトニ定メラレシニヨリ遊戯ニ屬スル閑文字モ亦其必要ヲ報スルニ會ヘリ因テ更ラニ旧稿ヲ把リテ本欄ニ見参スルコトナレリ題名ハ余ノ私撰ニシテ原名ニアラズ讀者之ヲ諒セヨ¹⁹

ここで言及されている「春宵閑話」とは、明治16年(1883年)に翠嵐生名義で「漫言」欄に相次いで連載された、やはりラム版に基づくシェイクスピア物のシリーズ(当初は「春宵夜話」)である。「余往キニ撒斯比亞ノ稗史ヲ抄録セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入り易キ小話ヲ譯出シ之ヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ掲ケ」という言葉から、翠嵐生の正体が藤田茂吉であることは間違いない²⁰。この時は、「The winter's tale」(3月15日から28日まで)、「As you like it」(4月5日から5月1日まで)、「The two gentlemen of Verona」(5月3日から24日まで)、「Hamlet prince of Denmark」(6月2日から21日まで)の4篇が掲載された。

「春宵閑話」／「春宵夜話」が掲載された「漫言」欄は、明治14年(1881年)の紙幅拡張に伴い創設された。担当は芳川春濤で、「餘興を添へて一察を博する爲め」設けられ「爾後斷續蕪章を掲げ幸ひに喝采を得しも」、翌年正月には「其欄内ペン／＼草の茂るに及べり」という有様であった²¹。その後再開された「漫言」欄では、山仙士(外山正一)による『ヘンリー八世』Henry VIIIのウルジー枢機卿の台詞の翻訳が掲載されたりもしているが²²、お世辞にも活発とはいえない状態が続いていた。

そうしたなか、明治16年(1883年)3月14日の「漫言」欄に、翠嵐生名義で「春宵夜話緒言」が掲載される。翠嵐生は、「必要に加ふるに娯樂を以てするハ新聞紙に若くものなし紙中載る所の物奇談珍説ハ言ふもさならん詩文滑稽故事

¹⁹ 『郵便報知新聞』第3537号(1884年12月16日)、第2-3面。

²⁰ 柳田、271頁。

²¹ 芳川春濤「御無沙汰の云譯」、『郵便報知新聞』第2673号(1882年1月4日)、第3面。

²² 『郵便報知新聞』第2733号(1882年3月25日)、第3面。同年4月19日の第2753号には「小言」欄にやはり山仙士による「ヘヌリー第四世」中の一段が掲載され、「鳴鶴」すなわち藤田茂吉による漢文のコメントが添えられている(第2-3面)。ウルジー枢機卿の台詞の翻訳にも漢文のコメントがつけられており、評者の名前は無いが、やはり藤田のものと考えて間違いないだろう。

來歴圍碁の手合せ演劇の評語貴社唯之を備へたり即ち必要と快楽とを兼ねるものにして余をして貴社の新紙を愛戀せしむるは此にあり」と、『郵便報知新聞』の紙面を賞賛する。しかし同紙には続き物が欠けている――

かの演劇を好むの餘り役者とならんと欲するか如く余も亦記者の眞似方をなして貴社に一臂を添へ貴社新聞紙に一層の光彩を放たしめんと欲す（これは失敬）否な貴社新聞を汚さんとす是れ他にあらず漫言の一欄を暫く借り切りとなし最も面白く殊に絶妙なる西洋の小説類に就き其粹を抜き其精を選び世に必要に人に快楽を興ふるものを余か椽大（否）余か拙文にて譯出し以て貴社に寄せんとす是れ余が寝物語に小供等に話聞かせる種本なり因て其題号を春宵夜話とは名けたり而して余ハ先つ「セキスピーア」が妙作の筋書を至極平易にものして童蒙にも解し得べき話となし左に綴ること然りなんと面白ひものでハござらぬか²³

つまり藤田茂吉は、翠嵐生という外部の人物からの寄稿を装って、「春宵閑話」／「春宵夜話」シリーズを掲載したのである。途中、従来の「漫言」欄的な投書も掲載されており、「借り切り」とはなっていないが、先述のように4篇が連載される。21日に「Hamlet prince of Denmark」が終了したあとは、これまで「漫言」欄に度々登場し、のちに「叢話」欄に「胸の有邪無邪」を連載する寒林学士による記事を最後に²⁴、「漫言」欄はまたしばらく姿を消すことになる。

つまり、矢野文雄の『嘉波通信』や『浮城物語』以前にも、『郵便報知新聞』には少なくとも明治16年（1883年）には連載小説が存在していた。それらには翠嵐生、九阜山史、九阜生、寒林学士という名前がクレジットされているが、実は翠嵐生、九阜山史、九阜生のみならず、寒林学士の正体もまた、藤田茂吉である²⁵。また『繫思談』は、実際の翻訳者は朝比奈知泉であったが、のちに藤田茂吉・尾崎庸夫名義で単行本化されている²⁶。直接的、間接的に、『郵便報知新聞』の続き物は藤田茂吉が生み出したものだったのである。

²³ 『郵便報知新聞』第3003号（1883年3月14日）、第3面。

²⁴ 寒林學士「撃案餘響」、『郵便報知新聞』第3093号（1883年6月29日）、第3面。

²⁵ 野田、28-29頁。

²⁶ 柳田、60頁。

ここで興味深いのは、「春宵閑話」／「春宵夜話」シリーズの始まった明治16年(1883年)3月15日が、ほかならぬ『経国美談』前編の刊行日であったということである。これは偶然とは思えない。それまであまり機能していなかった欄を使い、矢野文雄の著書の刊行に合わせ、藤田茂吉が連載小説の掲載を試行したとみて、まず間違いないだろう。この実験は、外部からの寄稿を装うという保険をかけておこなわれたが、やはり時期尚早と判断されたのか(矢野によって?)、「故アリテ之ヲ紙上ニ載スルヲ廢」という結果に終わる。しかし、連載開始にあたっての「貴社新聞紙に一層の光彩を放たしめんと欲す」「椽大」といった冗談めかした表現からは、藤田の意気込みが伝わってくる。

明治19年(1886年)の矢野による「改良意見書」は、「価格、形態、文体、記事内容のすべてにおいて、大新聞と小新聞の垣根を吹き飛ばす一大改革」²⁷であり、『郵便報知新聞』を政党機関紙から近代的新聞へと脱皮させた立役者が矢野文雄であったことは確かである。しかしそうした改革の種を蒔いたのが、新聞とは「必要と娯樂とを兼ねるもの」であると考え、外部からの寄稿を装ってまで大新聞に連載小説を載せることを試みた藤田茂吉であったことは、強調されてしかるべきだろう。「余往キニ撒斯比亞ノ稗史ヲ抄録セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入り易キ小話ヲ譯出シ之ヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ掲ケ」と述べて、翠嵐生の正体が自分であったことを明かす藤田の口ぶりに、おのれの先見の明に対する自負心を感じるのには、私だけだろうか。

政治的物語としての『ロミオとジュリエット』

前節で確認したように、藤田茂吉は『郵便報知新聞』紙上に複数のシェイクスピア物を寄稿している。これは、大新聞における連載小説の試行であったという意味だけではなく、ラム版に基づくものであるとはいえ、日本におけるシェイクスピア紹介としては最初期のものであるという意味でも、注目に値する。メディア研究とシェイクスピア研究の双方で見過ごされてきたこれらの作品群には、「落花の夕暮」と題した『ロミオとジュリエット』も含まれるが、ことこの恋愛

²⁷ 土屋、255頁。

悲劇に関しては、日本に紹介されたのはこれが初めてではない。『郵便報知新聞』の「落花の夕暮」より前に、ふたつの『ロミオとジュリエット』が存在している。そしてそのいずれにも、報知社が関わっている。

日本で最初の『ロミオとジュリエット』は、明治12年(1879年)に『遊戯雑談 喜楽の友』という雑誌に連載された「ロミオとジュリエットの話」である。やはりラム版に依拠するもので、連載は無署名であるが、訳者は矢野文雄の弟、小栗貞雄であると思われる。この雑誌の「賣捌所」の筆頭には報知社の名前が挙げられており、出版したのは沼津兵学校で岡敬孝と同級生であった竹村正路である。第2号には岡が「祝詞」を寄せているが、その署名は、「報知社 岡敬孝述」となっている。創刊にあたって竹村は、4年後の藤田茂吉の「必要と娯樂とを兼ねるもの」という言葉を先取りするかのように、「我々ハ今遊歡娛樂を主とする新紙を創設して以て人生の勞役勤苦ニ偏倚するを防ぎ兼て又近來新紙の政論常務に偏倚するを救はんと欲するなり」²⁸と述べている。この創刊号には、矢野文雄がホップ苗および葡萄苗の販売広告を掲載している。この雑誌が報知社と密接な関係を持っていたことは明らかである²⁹。

第2の『ロミオとジュリエット』は、静岡の地方紙『函右日報』に明治17年(1884年)2月9日から連載された「歐洲奇聞花月情話」である³⁰。同紙は前年末に体制が一新され、『郵便報知新聞』の系列紙となっていた。作者の菊亭香水こと佐藤蔵太郎は、大分での教員生活ののち、同郷の先輩、矢野文雄の誘いを受けて上京し、報知社に入社した。この連載は、2月21日にバルコニー・シーンを描いて中絶しているが、その理由はほかならぬ藤田茂吉の圧力であった。

菊亭がこの『ロミオとジュリエット』を「函右日報」に訳載し始めたのを、報知社の主筆藤田鳴鶴(これも菊亭の同郷先輩)が見て、あの話は自分が後で「報知」に載せようとしているものだから、君の方を止めて

²⁸ 「社言」、『遊戯雑談 喜楽の友』第1号(1879年)、1頁(1頁)。

²⁹ 雑誌『喜楽の友』および竹村正路については、近藤弘幸「日本最初の『ロミオとジュリエット』——雑誌『喜楽の友』と小栗貞雄」、『人文研紀要』第79号(2014年)、41-73頁および「三河武士と『ロミオとジュリエット』——竹村正路伝」、『英學論考』第43号(2014年)、59-86頁を参照。

³⁰ 「歐洲奇聞花月情話」に関しては、近藤「日本最初の『ロミオとジュリエット』」、52-59頁および柳田、272-75頁を参照。

くれなくては困るといったので、菊亭も止むなく、中絶にしてしまったのだという。³¹

今なら完全なパワハラであるが、佐藤の証言は、一旦「紙上ニ載スルヲ廢」することを余儀なくされたシェイクスピア物の連載を再開する意志を、藤田が持ち続けていたことを物語っている。とはいえ、複数のシェイクスピア物を訳した藤田であるから、そのうちひとつぐらいは同郷の後輩に譲ってやってもよさそうなものである。藤田は『ロミオとジュリエット』に、なにかしら特別な思い入れを持っていたものと思われる。

佐藤蔵太郎は、『慘風悲雨 世路日記』の作者として明治文学史にその名を残している。この作品は最初、明治13年(1880年)に大分県豊前国下毛郡中津古博多町に本局を置く『田舎新聞』の「小言」欄に、鶴谷向水生名義の「月氷奇遇 艶才春話」として連載された³²。このタイトルは、ブルワー＝リットン『アーネスト・マルトラバーズ』*Ernest Maltravers* およびその続編『アリス』*Alice* を、明治11年(1878年)に丹羽純一郎が抄訳して好評を博した、『欧洲奇事 花柳春話』を意識したものである³³。その後、『田舎新聞』での連載に手を加えたものが、『月氷奇遇 艶才春話』上編として明治15年(1882年)4月に、新たに書き下ろされた中編が同年7月に、それぞれ菊亭香水名義で、大角豊治郎によって出版された(春山堂)。上編・中編は、

多少売れたと見えて、大角は下編を催促したが、当時上京後「郵便報知」の記者として多忙であった菊亭には、急に下編の完成に着手することが出来なかった。ところが明治十七年二月、菊亭は、埼玉県会の聘に応じ、書記長となって赴任した。この時少し閑暇を得たので、旧稿を増訂し、

³¹ 柳田、275頁。

³² 『田舎新聞』第196号(1880年1月28日)附録第1面、第199号(2月7日)第3面、第203号(2月25日)第2-3面、第206号(3月7日)第3面、第211号(3月27日)第3-4面、第214号(4月3日)第3面、第223号(5月15日)第3面、第224号(5月19日)第3-4面、第237号(7月7日)第3-4面、第244号(8月4日)第3-4面、第255号(9月18日)第3面、第256号(9月22日)第3面、第260号(10月6日)第3面、第261号(10月9日)第3面。

³³ 柳田泉『政治小説研究』明治文学研究第8-10巻、全3巻(春秋社、1967-68年)、上巻209頁。

下編の趣向をつけ、遂に完成したのである。これが十七年四月、そうして三編を合して一冊に出版する時に（十七年六月出版東京稗史出版社）改題し『惨風悲雨 世路日記』といった。³⁴

明治 17 年（1884 年）2 月とは、まさに「欧洲奇聞花月情話」が連載されていた時期である。このタイトルもまた、『欧洲奇事 花柳春話』を意識したものであることは、言うまでもないだろう³⁵。

柳田泉は、『世路日記』について、自由民権思想を喧伝して当時流行した政治小説「がかったもの」ではあるが「本来政治小説ではない」³⁶としている。確かにこの作品では、その結末で唐突に久松菊雄が上京して「某ノ政黨ニ加盟シ演説ニ文壇ニ専ラ彼ノ改進自由ノ説ヲ主張シ居ル」³⁷ことが語られるにすぎない。この作品は当時の読者に広く受け入れられたが、

恐らくこの小説をそうまで青年社会に愛読させ歓迎させたのは、この小説のもっている感情的方面であろうと思う。この少年少女が環境と伝統の束縛、家族制度の圧政等から脱して、希望の多い若々しい新社会を形作ろうとする努力、いわばこの二人の求める感情的解放、そこに著者自身の要求の発露があり、当時の多数青年の共鳴があったのではないか。³⁸

柳田は「感情的」という言葉でそれを政治とは切り離して考えようとしている。しかしながら、「環境と伝統の束縛、家族制度の圧政等から脱して、希望の多い若々しい新社会を形作ろうとする努力」とは、ある種の政治的情熱といえるだろう。自由民権思想の直接的な発露がほとんど見られないという意味でいわゆる政治小説ではないとしても、『世路日記』が紡ぎ出すのは、まぎれもなく政治的な物語である。

³⁴ 柳田『政治小説研究』、上巻 209 頁。

³⁵ 『函右日報』の連載では、「欧洲奇聞花月情話」の「欧洲奇聞」は角書きとはなっていない。これはおそらく『函右日報』編集部ミスだろう。

³⁶ 柳田『政治小説研究』、上巻 212 頁。

³⁷ 菊亭香水（佐藤藏太郎）『惨風悲雨 世路日記』（東京稗史出版社、1884 年）、下編 71 頁。

³⁸ 柳田『政治小説研究』、上巻 213 頁。

明治42年(1909年)2月20日発行の雑誌『太陽』第15巻第3号は、「明治史第7編」として「文藝史」を特集している。その「第3編 小説及び評論壇」は、丹羽の『花柳春話』が誕生した背景を、次のように説明している。

一方には政治熱の度が四十度以上に及んでゐる、他方には活動すべき場所は充分に無いと言ふのであるから、多数の後進、青年輩は、單に政治的想像を違うして居るのみであつた。

此の政治的相像を悦ばしたものは、外國、殊に英吉利の政治小説、或はロマンチック小説であつた。當時社会に出でゝ活動しつゝあり、或はまた活動せむとする者は、概ね英語を勉強しつゝあつたから、先づ英國小説に接し、而も其の政治的思想と傳奇的嗜好から、リットン、ヂズレーリー〔或〕はスコット等の作物を愛讀し、且つ之を反譯するに至つた。³⁹

こうした翻訳の流行が、「幾許もなく、同様の政治的、傳奇的小説を作らむとする人」たちを生み出すこととなる。佐藤蔵太郎もそのひとりである。

このようにして生み出された「政治的、傳奇的小説」群について、『太陽』は、「當時の政治熱は、西南戦役以後一變化して、艶氣を帯びたものと謂ふべきである」と説明する。

此の大刺戟以前には、たゞ殺風景なる、率直なる政治熱が流行したのみであるが、此の時代に入りては、同じく政海に狂奔するにしても、女性美的艶氣を附帯して、華美に活動せむとする氣風が生じて居るやうである。譬へば十六七才の少年が、漸く色氣付いて、同じく男性的氣焰を吐く内にも、何となく紅粉の臭を附帯するやうになつたのである。一口に言へば、從來の少年的客氣が一轉して聲變りしたのであらう。⁴⁰

これらの「政治的、傳奇的小説」群は、あくまで「女性美的艶氣を附帯」するものであり、主人公の異性愛的關係は、いわば物語の背景に過ぎない。作者の主な

³⁹ 「第3編 小説及び評論壇」、『太陽』第15巻第3号(1909年)、38-96頁(45頁)。

⁴⁰ 「第3編 小説及び評論壇」、46頁。

関心は、主人公の「政海」における「狂奔」にある。だからこそ柳田泉は、それがつけたしのようにしか織り込まれず、むしろ主人公の異性愛的関係に重点が置かれた『世路日記』について、「政治小説がかったもの」ではあるが「本来政治小説ではない」と評価するのである。

しかし、『太陽』の解説によれば、そもそも「政治的相像」と「ロマンチック小説」は、その根を同じくするものであった。そう考えると、『世路日記』に政治小説めいた結末をつける下編を執筆していたまさにその時期に、佐藤が『ロミオとジュリエット』の翻案を書こうとしていたことは、きわめて示唆的である。『ロミオとジュリエット』は、「環境と伝統の束縛、家族制度の圧政等から脱して、希望の多い若々しい新社会を形作ろうとする努力」が、ふたりの恋人たちの性愛関係と直接的に結びついた物語である。彼はそこに、社会変革という「政治的相像」を重ね合わせていたのではないだろうか。そしてそれは、多かれ少なかれ小栗貞雄や藤田茂吉にも共通する思いだったのではないだろうか。

藤田茂吉や佐藤蔵太郎は、佐伯藩の下士の出であり、同じ佐伯の出身でありながら、中士ないしは上士の矢野家とは、その境遇に大きな差があった⁴¹。藤田が慶應義塾に通うことができたのは、矢野文雄の経済的援助のおかげである。矢野の代表作『経国美談』の「纂譯兼出版人」として記された彼の名には「大分縣士族」⁴²という肩書がつけられているが、自らを「純々粹々の平民」⁴³と位置づけた藤田の『文明東漸史』の「著者兼出版人」は、「東京府平民」である⁴⁴。小栗貞雄は、矢野家に生れながら、四男であったために小栗家の養子となった⁴⁵。藤田、佐藤、小栗が、「名前」や、それが運命を左右することに対して、複雑な思いを持っていたとしても、不思議ではない。

⁴¹ 野田は「矢野家は上士に属した」（17頁）としているが、矢野の公式の伝記ともいえる小栗又一『龍溪矢野文雄君傳』（春陽堂、1930年）では「いはゞ中士の格であつた」とされている（68頁）。藤田の生い立ちに関しては、野田、13-23頁を、佐藤の生涯については、柳田『政治小説研究』、上巻222-26頁を参照。

⁴² 矢野文雄『齊武名士 経国美談』全2巻（報知新聞社、1883-84年）、下篇奥付。

⁴³ 『郵便報知新聞』第735号（1875年7月29日）、第1面。

⁴⁴ 藤田茂吉『文明東漸史』聞天樓叢書（報知社、1884年）、奥付。藤田のもうひとつの代表作『済民偉業録』聞天樓叢書（集成社書店、1887年）の奥付には、「著者兼出版人」として、肩書なしで藤田の名前だけが記載されている。

⁴⁵ 小栗の生涯に関しては、三田商業研究会編『慶應義塾出身者名流列傳』（實業の世界社、1909年）、235-36頁を参照。

おわりに

小栗貞雄、藤田茂吉、佐藤蔵太郎の直接、間接の師である福沢諭吉は、「足輕よりは數等宜しいけれども士族中の下級」⁴⁶の中津藩士の子として生まれ、幕臣として取り立てられたが、維新後は平民として生きることを選択した。彼はその口述自伝において、「名前」とは実体を伴わない影に過ぎないということを確認したという、印象深いエピソードを披露している。

又私の十二三歳の頃と思ふ兄が何か復古を揃へて居る處を私がドタバタ踏んで通つた所が兄が大喝一聲コリヤ待と酷く叱り付けて「お前は眼が見えぬか、之を見なさい何と書いてある奥平大膳大夫と御名があるではないかと大造な權幕だから「ア、左様で御在ましたか私は知らなんだと云ふと「知らんと云ても眼があれば見える筈ぢや御名を足で踏むとは如何云ふ心得である臣子の道はと何か六かしい事を並べて厳しく叱るから謝らずには居られぬ「私が誠に悪う御在ましたから堪忍して下さいと御辭儀をして謝つたけれども心の中では謝りも何もせぬ「何の事だらう殿様の頭でも踏みはしなからう名の書いてある紙を踏〔んだ〕から構ふことはなさうなものだと甚だ不平でソレカラ子供心に獨り思案して兄さんの云ふやうに殿様の名の書いてある復古を踏んで悪いと云へば神様の名のある神札を踏んだら如何だらうと思て人の見ぬ處で御札を踏んで見た所が何ともない「ウム何ともないコリヤ面白い今度は之を洗手場に持て行て遣らうと一歩を進めて便所に試みて其時は如何かあらうかと少し怖かつたが後で何ともない「ソリヤ見たことか、兄さんが餘計な、あんな事を云はんでも宜いのぢやと獨り發明したやうなものだが是れ許りは母にも云はれず姉にも云はれず云へば屹と叱られるから一人で窃と黙つて居ました⁴⁷

「私の爲めに門閥制度は親の敵で御座る」⁴⁸と語つた福沢にとって、「名前」と

⁴⁶ 時事新報社編『福翁自傳』（時事新報社、1899年）、1頁。

⁴⁷ 時事新報社編、25-26頁。

⁴⁸ 時事新報社編、10頁。

はまさにその門閥制度の象徴であった。『ロミオとジュリエット』におけるモンタギュー家とキャピュレット家には、明確な階級差は書き込まれていない。しかし、「名前」に引き裂かれた恋人たちが、その障害を乗り越えようと行動する悲恋物語が、単なる恋愛物語ではなく多分に政治的意味を持った物語として彼の門下生たちの心をとらえたことは想像に難くない。明治前半の人々にとって、『ロミオとジュリエット』は、門閥打破を訴える、優れて政治的な物語だったのではないだろうか。

(東京学芸大学 教授)